

日本語、韓国語、中国語の主題の省略について

一川端康成『伊豆の踊子』の原文と翻訳文を検討材料として一

穆 欣

1. はじめに

日本語、韓国語、中国語は、それぞれの構文、文法などが異なっていることによって省く成分や省く形式などに関して相違がある。とりわけ談話として見た場合、主題優勢言語 (Topic-prominent language) とされている日本語、韓国語、中国語においては、主題の省略がしばしば見られる。また、穆 (2012) は、川端康成『伊豆の踊子』を検討材料として、実際に日本語と中国語の主題に関する省略を対照してみた結果、いくつかの共通点と相違点を明らかにしている。

2. 研究の目的

穆 (2012) は、三上 (1970) が主張している日本語における主題の省略の五法則 (以下は略題の五法則) の妥当性を確認し、その法則性がどのぐらい中国語に適合できるかということに関して考察した。本稿では、金 (2008)、穆 (2012) の先行研究に基づいて、三上の略題の五法則がどのぐらい韓国語に適合できるかに関して検討し、その結果を用いて日本語、韓国語、中国語の間に存在する主題の省略に関する異同を明らかにしたい。

3. 先行研究

三上 (1970) の略題の五法則に関して、穆 (2012) はそれぞれ該当する例文を「伊豆の踊子」から抜粋した。以下、各例文の主題は二重下線で示し、主題を省略している部分を「 \emptyset 」で表す。略題が二つ以上見られるものは、 $\emptyset_1\emptyset_2\emptyset_3$ のように示した。

その1、主題“何々ハ”は次々の文まで勢力を及ぼすから、第2文以下が略題になることがある。

- (1) 踊子は竹束のところまで引き返すと、また走って来た。今度は \emptyset 中指くらいの太さの竹を私にくれた。そして、 \emptyset 田の畦に背中を打ち付けるように倒れかかって、苦しそうな息をしながら女達を待っていた。

その2、ある文で注意の焦点にあった名詞は、自然に次の文の主題に成上ることがある。その名詞は何格であってもよい。

- (2) この婆さんを東京へ連れてってくんねえか。 \emptyset かわいいそうな婆さんなんだ。

その3、すぐ前に、同じ（または似た）動詞、形容詞、名詞があれば、それと同様に限定された意味になる。それで、修飾部分だけは省けることになる。

(3) 「今夜はまだこれからどこかへ回るんですか。」

「 \emptyset 回るんですが。」

その4、条件句が主題を形成することがある。一般的な道理を表すこともある。

(4) 天井がなく、街道に向かった窓ぎわにすわると、 \emptyset 屋根裏が頭につかえるのだった。

その5、話し手と相手の眼前にあるモノは言い表されないことがよくある。

(5) 「 \emptyset_1 何かご不幸でもおありになったのですか。」

「いいえ、 \emptyset_2 今人に別れて来たんです。」

穆 (2012) は、侍桁の中国語の訳文が三上の略題の五法則その2、その3、その4に適合できるという結果を得た。

金 (2008) は日本語の主題マーカーである「は」と韓国語の主題マーカーである「은/는」に関して検討を加えている。また、日本語の主題と韓国語の主題の省略について、頻繁に代名詞に置き換えられたり、特に先行文脈が存在する場合に省略されたりすると指摘し、以下のような例を挙げている。

(6) a. ミンスは学生である。 / 彼は学生である。 / \emptyset 学生である。

b. 민수는 학생이다. / 그는 학생이다. / \emptyset 학생이다.

しかし、金 (2008) は先行文脈が存在するという点に言及しているが、挙げられた例文は談話レベルではない。それに、様々な構文や文脈によって、日本語と韓国語の主題マーカー「は」と「은/는」の省略には、どのような異同があるかに関しても深く検討していない。

なお、中国語の場合、主題は無標である上に形態上の変化もないので、以下は中国語の主題に関する判断基準あるいは定義に関して示しておく。

Li & Thompson (1981 : 87) は、中国語の主題に関して、「A topic, then, is typically a noun phrase (or a verb phrase) that names what the sentence is about, is definite or generic, occurs in sentence-initial position」(主題は文頭に来る名詞句であり、文が何について言っているか、限定的な内容か一般的な内容かを指す)と定義している。また、以下のように「主題なし文」(sentences with no topic)に関する例を挙げている。この例文は三上のその4に当てはまる。

(7) A: nǐ kàn guo Lǐsì méiyǒu? (あなたは李四を見た?)

B: méi kàn guo. (\emptyset 見ていない。)

4. 研究方法

穆 (2012) の中で三上 (1970) の略題の五法則に該当する文を『伊豆の踊子』の中から抜粋した例文を検討材料として、原文 (日本語) と訳文 (韓国語・中国語) を対照し、検討を加える。

原文の『伊豆の踊子』は新潮文庫版を用い、韓国語の訳本は문예출판사（文藝出版社）より出版された장경룡の訳本『설국(雪國)』の中の「伊豆の踊子」を用いた。また、穆(2012)は、中国語の訳本は上海訳文出版社より出版された侍桁の訳本『雪国』の中の「伊豆の踊子」を用いたが、本稿は吉林大学出版社より出版された葉渭渠の訳本『雪国・伊豆舞女』の中の「伊豆の踊子」を用いた。

なお、本稿は格文法に基づいて主格と主題に分けて分析する。とりわけ談話文法の観点から日本語の場合、ハの前に来る語を主題として、韓国語の場合、「은/는」前に来る語を主題とする。三上の主張する「ガ格」を「主格」と見なし、韓国語の場合、「이/가」を主格とする。

そのほか、訳文の方を<>の中に入れる。訳文では補われた部分を下線で示す。

5. 分析

その1「主題“何々ハ”は次々の文まで勢力を及ぼすから、第2文以下が略題になることがある」

以下は三上(1970)が指摘したその1に当てはまる『伊豆の踊子』の中の原文及び訳文である。

(8) a. 踊子は竹束のところまで引き返すと、また走って来た。今度は \emptyset_1 中指くらいの太さの竹を私にくれた。そして、 \emptyset_2 田の畦に背中を打ち付けるように倒れかかって、苦しそうな息をしながら女達を待っていた。(=(1))

b. < 무희는 대나무 다발이 있는 데까지 되돌아가더니 또다시 달려왔다. 이번에는 \emptyset_1 가운뎃손가락만 한 굵기의 대를 나에게 주었다. 그리고 \emptyset_2 발두둑에 등을 박아 붙이듯이 쓰러져서 괴로운 듯이 숨을 몰 아쉬면서 여자들을 기다렸다.>

c. < 舞女折回堆放矮竹捆的地方以后，又跑了过来。这回她给我拿了一根中指般粗的。她身子一晃，险些倒在田埂上，气喘吁吁地等待着其他妇女。>

(8)に示されているように日本語の原文の場合、第一文の主題である「踊子は」は次の各文まで勢力を及ぼし、第2文以下が略題となっている。とりわけ、(8)のように日本語の主題は第二文、第三文まで勢力を及ぼすことができる。

韓国語の訳文の場合、第一文の主題である「무희는」(オドリコハ)は日本語と同じように第二文、第三文まで勢力を及ぼし、第二文と第三文が略題となっている。

しかし、日本語・韓国語とは異なって中国語の訳文の場合、第二文と第三文の文頭にそれぞれ代名詞の「她」(カノジョハ)を補っている。

(9) a. 私はそれが人の物であることを忘れたかのように海苔巻のすしなぞを食った。そして \emptyset 少年の学生マントの中にもぐり込んだ。

b. < 나는 그것이 남의 음식임을 잊기라도 한 듯이 김초밥 등을 먹었다. 그리고 Ø소년의 학생 망토속으로 기어 들어갔다.>

c. < 我忘了这是人家的东西，把紫菜饭团抓起来就吃。吃罢，Ø钻进少年学生的斗篷里…>

(9) の場合、日本語、韓国語、中国語は同じくØのところ¹に主題が省かれている。言わば、日本語、韓国語、中国語いずれも第一文の主題の勢力範囲が第二文まで及んでいるため、第二文の主題が省ける。

(8) と (9) では、日本語と韓国語の主題が省かれているのに対して、中国語の場合、(8) の主題は省かれていないが、(9) の主題が省かれている。言い換えれば、(8) と (9) の主題の勢力範囲が異なっている。一般に、日本語と韓国語における主題の勢力範囲は、意味的な関連を持っていれば、文という単位を越えられるが、中国語の主題の勢力範囲は、意味上の関連や構文などの様々な要素からの制限があるため、中国語の主題は日本語と韓国語のように省くことができなく、多くの場合には代名詞などを主題としておぎなわなければならない。

そのため、三上の略題の法則その1は韓国語には適合するが、中国語には部分的にしか適合しない。

その2 「ある文で注意の焦点にあった名詞は、自然に次の文の主題に成上がることがある。その名詞は何格であってもよい」

以下は三上 (1970) が指摘したその2に当てはまる『伊豆の踊子』の中の原文及び訳文である。

(10) a. この婆さんを東京へ連れてってくんねえか。Øかわいいそうな婆さんなんだ。
(=(2))

b. < 이 할머니를 도쿄에 모셔다 드리지 않겠는가? Ø가엾은 할머니야.>

c. < 拜托您把这位老婆子带到东京，行不行啊？她是个可怜巴巴的老婆子。>

(10) の場合、日本語の原文では第一文のヲ格が次の文の主題となっているが、第二文には主題の「この婆さんは」が省かれている。

韓国語の訳文は日本語の原文と同じく、第一文のヲ格が第二文の主題となっているが、Øのところには主題「이 할머니는」(コノバーサンハ)が省かれている。

中国語の訳文は日本語・韓国語と異なって、第一文の対格を承けるにもかかわらず、第二文の文頭に代名詞の主題「她」(カノジョハ)を補っている。

(11) a. 「杖にあげます。一番太いのを抜いて来た。」
「Øだめだよ。太いのは盗んだとすぐわかって、見られると悪いじゃないか。返して来い。」

- b. < “지팡이로 드리겠어요. 제일 굵은 걸 뽑아 가지고 왔어요.”
 “∅안돼. 굵은 건 흠친 줄 금방알게 돼. 들키면 곤란하잖아. 도로 갖다놓고 와.” >
- c. < “给您当手杖用。我捡了一根最粗的拿来了。”
 “∅可不行啊。拿粗的人家马上晓得是偷来的。要是被发现，多不好啊？送回去！” >

(11) は栄吉と踊子の会話文である。(10)と同じようにヲ格が次の文の主題となっている。日本語の原文の∅のところは前文の「一番太いの」を指し、主題「一番太いのは」が省かれている。韓国語と中国語の訳文は日本語の原文と同じように、それぞれ主題が省かれている。

「だめだよ」「危ない」「おいしい」などのような一語文は日常会話で多用されている。対面して談話を構成するからこそ「だめだよ」の前の要素を言わずに済み、一語文として成立する。また、文の流れから見れば、(11)にある「だめだよ」は、後の文とも意味上の関連があるとも考えられる。つまり、「太いのは盗んだとすぐわかって、見られると悪いから、だめだよ」というように解釈することもできる。「だめだよ」を倒置して、まず結論を言っておいて次の文にその理由を挙げるといふ文構造になっていると解釈できる。そのほかの一語文については、以下のような例文も見られる。

- (12) a. 「学生さんがたくさん泳ぎに来るね。」踊子が連れ女の女に言った。
 「∅夏でしょう。」と、私がふり向くと、踊子はどぎまぎして、
 「冬でも……。」と、小声で答えたように思われた。
- b. < “학생들이 수영하러 많이 오더군요” 하고 무희가 일행인 여자에게 말했다.
 “∅여름이겠죠?” 하고 내가 돌아다보니까 무희는 당황하여,
 “겨울에도……” 하고 나직한 목소리로 대답한 것 같았다.>
- c. < “很多学生哥都来这儿游泳呢。”舞女对女伴说。
 “∅是在夏天吧?” 我回头问了句。舞女有点慌张地小声回答说：
 “冬天也……” >

(12) では一連の会話の流れに、「夏でしょう」という一語文が出現している。日本語、韓国語、中国語いずれも∅のところに主題が省略されている。「学生さんがたくさん泳ぎにくるのは夏でしょう」というように考えられる。「夏でしょう」は第一文の内容を承けて一語文として成立する。

また、(10)と(11)に示されているように、日本語、韓国語においては、第一文にある名詞は自然に第二文以下の主題となる場合、その名詞を承けて主題が省かれることが普通である

が、中国語の訳文は、前文の名詞を承けても省略しない例文があるため、三上の略題の法則その2は韓国語に適合するが、中国語には部分的にしか適合しないと考えられる。

その3 「すぐ前に、同じ（または似た）動詞、形容詞、名詞があれば、それと同様に限定された意味になる。それで、修飾部分だけは省けることになる」

以下は三上（1970）が指摘したその3に当てはまる『伊豆の踊子』の中の原文及び訳文である。

(13) a. 「肩は痛くないかい。」と、おふくろは踊子に幾度もだめを押していた。
「手は痛くないかい。」踊子は太鼓を打つ時の手まねをしてみた。
「 \emptyset 痛くない。打てるね、打てるね。」

b. <“어깨는 아프지않니?”하고 어머니는 무희에게 몇 번이고 다짐을 받고 있었다.
“손은 아프지않아?”무희는 북을 칠 때의 손짓을 해보인다.
“ \emptyset 안 아파요. 칠 수 있어요, 칠 수 있어요.”>

c. <“肩膀不痛吗?” “手不痛吗?”
阿妈三番五次地叮问舞女。舞女打出敲鼓时那种漂亮的手势。
“ \emptyset 不痛。还能敲，还能敲嘛。”>

(13) では、おふくろは踊子に「肩」と「手」が痛くないかを聞いた。質問に対して、踊子の回答はただ「痛くない、打てるね、打てるね」である。応答文に省かれた成分としては「肩は痛くない」、「手は痛くない」及び「肩も手も痛くない」と考えられる。すぐ前の質問文では「肩は」と「手は」がすでに出現したため、応答文にはすべて省略となっている。韓国語と中国語の訳文には日本語の原文と同じ省略が見られる。

(14) a. 娘たちが碁盤の近くへ出て来た。「今夜はまだこれからどこかへ回るんですか。」
「 \emptyset 回るんですが。」と、男は娘たちのほうを見た。(=(3))

b. <아가씨들이 바둑판 가까이 나왔다.
“오늘밤은 이제부터 또 어디를 돌 건가요?”
“ \emptyset 돌긴 돌아야겠습니다만”하고 사나이는 아가씨들 쪽을 돌아봤다.>

c. <姑娘们走到了棋盘边。“今晚还到什么地方演出吗?” “还要去 \emptyset 的, 不过…”
汉子说着, 望了望姑娘们。>

(14) では、会話の応答として日本語の原文の場合、「今夜は」ばかりでなく、「まだこれからどこかへ」という修飾部分も省かれている。(13) と (14) に示されているように、話し

手と聞き手双方が自明なことなら、応答文の中の修飾部分は質問文と同じ場合、省くことができる。韓国語と中国語の訳文は日本語の原文と一致している。

また、例(14)だけでなく例(10) (11) (13) (17) (18)に示されているように、日本語の場合、基本的に疑問文には、疑問符を打たないが、韓国語と中国語の場合は、疑問文の文末に疑問符を打つのが一般的である。

日常会話では日本語の場合、主題のみならず文意を不明にしない限り、ほかの限定する性格を有する成分がよく省かれる。これはその3の特徴だと言えよう。会話文の場合が多いため、文脈を形成することによって、質問文の主題を承けて応答文では略題となっており、質問文の中の修飾部分も応答文では省ける。

(13)と(14)の韓国語と中国語の訳文には日本語の原文と同じ主題の省略が見られる。そのため、三上の略題の法則その3は韓国語と中国語にも適合すると言える。

その4「条件句が主題を形成することがある。一般的な道理を表すこともある」

その4に関して、三上(1970)は以下のように「条件句が主題を形成」と「一般論」という二通りの解釈を分けて解説している。

- (15) a. そんなことを言うと、(君は)人に笑われるよ。(条件句が主題を形成)
 b. そんなことを言うと、(そう言った人は)人に笑われるよ。(一般論)
 c. 住みにくさが高じると、(ダレデモ)安い所へ引き越したくなる。(一般論)

以上に示された解説に当てはまる『伊豆の踊子』の中の原文及び訳文を以下に示す。

- (16) a. 天井がなく、街道に向かった窓ぎわにすわると、 \emptyset 屋根裏が頭につかえるのだった。(=(4))
 b. <거리를 향해서 창가에 앉으니까 \emptyset 다락방이 머리에 받히는 것이었다.>
 c. <那里没有天花板，窗户临街。我坐在窗边上，头要碰到屋顶。>

(16)は「条件句が主題を形成」する場合と「一般論」の場合という二通りの解釈が可能である。つまり、「天井がなく、街道に向かった窓ぎわにすわると、(ワタシハ)屋根裏が頭につかえるのだった」と「天井がなく、街道に向かった窓ぎわにすわると、(ダレデモ)屋根裏が頭につかえるのだった」というような二通りの場合が考えられる。韓国語の訳文は日本語の原文と同じく略題となっているが、中国語の訳文には「我」が補われている。

以上の例文に示されているように条件句が主題を形成する場合にせよ、一般的な道理を表すにせよ、日本語と韓国語においては主題が省かれる場合があるが、中国語の訳文には主題が省かれていない。そのため、三上の略題の法則その4は韓国語には適合するが、中国語には部分的にしか適合しないとと言える。

その5「話し手と相手の眼前にあるモノは言い表されないことがよくある」

その5に関して、三上（1970）はまた「こういう省略法は、日常会話にはずいぶんあるだろう。眼前にあるモノ『者』のうち、いつもながらなのは話し手と相手である。だから両者はよく省略される。（中略）日常の会話だけでなく、文章でもしばしば省略される」と指摘している。

その5の特徴は、対面して話をする場合、日本語において「これは」や「あなたは」「私は」などの主題が普通省かれていることである。その5に当てはまる『伊豆の踊子』の中の原文及び訳文が以下のように示される。

(17) a. 「 \emptyset_1 何かご不幸でもおありになったのですか。」
「いいえ、 \emptyset_2 今人に別れて来たんです。」(=(5))

b. <“ \emptyset_1 무슨 불행이라도 당했어요?”
“아니, \emptyset_2 방금 어떤 사람하고 이별하고 오는 길이에요.”>

c. <“你是不是遭到什么不幸啦？”“不，我刚刚同她离别了。”>

(17) は二人の会話文である。日本語の原文の場合、質問文と応答文の中の主題「アナタハ」と「ワタシハ」が省かれている。

韓国語の訳文は日本語の原文と同じく、主題「당신은」（アナタハ）と「저는」（ワタシハ）が省かれている。しかし、中国語の訳文は質問文の \emptyset_1 のところに「你」（アナタハ）が補われており、応答文の \emptyset_2 のところに「我」（ワタシハ）が補われている。

(18) a. 学生さん、 \emptyset_1 東京へ行きなさるのだね。 \emptyset_2 あんたを見込んで頼むのだがね、 \emptyset_3 この婆さんを東京へ連れてってくんねえか。

b. <학생, \emptyset_1 도쿄에 가는 거지? \emptyset_2 자네를 믿고 부탁하는데 말야. \emptyset_3 이 할머니를 도쿄에 모셔다 드리지 않겠는가?>

c. <同学, 您是去东京的吧? 我们信赖您, 拜托您把这位老婆子带到东京, 行不行啊?>

(17) は (18) と異なって一方的に話しかける会話文であるが、日本語の原文の \emptyset_1 \emptyset_2 \emptyset_3 のところに「学生さん、（アンタハ）東京へ行きなさるのだね。（ワタシハ）あんたを見込んで頼むのだがね、（アンタハ）この婆さんを東京へ連れてってくんねえか」というように補うことが考えられる。

韓国語の訳文は日本語の原文と同じように、 \emptyset_1 \emptyset_2 \emptyset_3 が省略されているが、中国語の訳文は \emptyset_1 のところに「你」（アンタハ）、 \emptyset_2 のところに「我们」（ワタシたちハ）を補っており、 \emptyset_3 のところに「您」（アナタハ）を補っている。

(17) と (18) に示されるように、三上の略題の法則その 5 は韓国語には適合するが、中国語の場合、部分的にしか適合しないと言える。

6. まとめ

本稿は三上の略題の五法則が韓国語に対して、どこまで適合できるかを考察し、日本語、韓国語、中国語において主題の省略の異同について検討してみた。

韓国語の主題マーカー「은/는」が日本語の主題マーカー「は」に対応し、韓国語の主格マーカー「이/가」が日本語の主格マーカー「が」に対応する。そのため、日本語と韓国語は語順が比較的に自由であり、「伊豆の踊子」を検討材料とする考察の結果として、三上の略題の五法則も適用できることが明らかになった。

日本語・韓国語と比べて中国語における主題、主格は無標であり、語順によって意味が決定される。そのため、構文、意味などの制限が日本語・韓国語より強い。葉渭渠の訳本を用いた中国語は、略題の五法則その 3 には適合するが、その 4 には適合しないという結果が得られた。またその 1、その 2、その 5 には部分的にしか適合しないことが明らかとなった。穆 (2012) は、侍桁の訳本を用いて分析した結果、略題の五法則その 1 に適合せず、その 2、その 3、その 4 に適合するが、その 5 には部分的にしか適合しないことを明らかにした。まとめを以下の表 1 に示す。適合する場合は○印、適合しない場合は×印、部分的にしか適合しないは△印を付けた。

表 1. 三上の五法則に対すると韓国語と中国語の適合状況

	韓国語 (장경룡訳)	中国語 (葉渭渠訳)	中国語 (侍桁訳)
その 1	○	△	×
その 2	○	△	○
その 3	○	○	○
その 4	○	×	○
その 5	○	△	△

葉渭渠の訳文と侍桁の訳文には、その 1、その 2、その 4、その 5 に関して相違が見られる。その 1 に関して (9) の葉渭渠の訳文 (b) と侍桁の訳文 (c) を対照させて以下のように示す。

- (9) a. 私はそれが人の物であることを忘れたかのように海苔巻のすしなぞを食った。そして∅少年の学生マントの中にもぐり込んだ。(原文)
- b. <我忘了这是人家的东西，把紫菜饭团抓起来就吃。吃罢，∅钻进少年学生的斗篷里…> (葉)
- c. <我好象忘记了不是自己的东西，拿起紫菜饭卷就吃起来，然后∅裹着少年的学生斗篷睡下去。> (侍)

両者の訳文は文頭の主題を「我」と訳出し、Øのところは日本語の原文と同じような主題の省略があるが、三上のその1の焦点は主題がいくつかの文を越える力があるか否かである。葉渭渠の訳文は第一文にある主題が句号（日本語では句点）を越えて、第二文は略題となっている。しかし、侍桁の訳文は文全体を逗号（日本語では読点）でつなげ、二文を一文に変えて、文中の主題が省略されている。中国語の主題の勢力範囲は意味、構文、句逗点などの要素の影響によって異なる場合がある。結果として、葉渭渠の例文はその1に当てはまるのに対して、侍桁の訳文は当てはまらない例文となっている。

その2に関して、(10)の葉渭渠の訳文(b)と侍桁の訳文(c)をそれぞれ以下のように示す。

(10) a. この婆さんを東京へ連れてってくんねえか。Øかわいいような婆さんなんだ。
(=2) (原文)

b. <拜托您把这位老婆子带到东京，行不行啊？她是个可怜巴巴的老婆子。>
(葉)

c. <打算拜托你把这个婆婆带到东京去，可以吗？Ø满可怜的一个老婆婆。> (侍)

日本語の原文は、第一文にあるヲ格が第二文の主題となり、略題となっている。中国語も第一文の対格を承けているが、葉渭渠の訳文(b)には第二文の文頭に「她」(カノジョハ)を補っている。侍桁の訳文(c)には、主題が省かれている。侍桁の訳文は中国語としては不適格ではないが、葉渭渠の訳文のほうが安定感があることも事実である。

その4に関して、(16)の葉渭渠の訳文(b)と侍桁の訳文(c)をそれぞれ以下のように示す。

(16) a. 天井がなく、街道に向かった窓ぎわにすわると、Ø屋根裏が頭につかえるのだった。(原文)

b. <那里没有天花板，窗户临街。我坐在窗边上，头要碰到屋顶。> (葉)

c. <没有天花板，坐在面临街道的窗口上，Ø头要碰到屋顶。> (侍)

日本語の原文は一文であるが、葉渭渠の訳文(b)は二文に分けて訳している。第二文の文頭に主題「我」を補っている。形式的に見れば、三上の主張している「条件句が主題を形成」に相当した場合であるが、略題されていない。

侍桁の訳文(c)は日本語の原文に近く、一文のままであり、同じように省略が見られる。侍桁の訳文には主題が省かれているため、一般論としての略題であると考えられる。結果として、侍桁の訳文は法則その4に当てはまる。

訳文(b)と(c)の差異は、訳者の翻訳方針が異なるためであるが、いずれも中国語としては適格な文である。

その5に関する(17)と(18)の葉渭渠の訳文(b)と侍桁の訳文(c)を以下のように示す。

- (17) a. 「 \emptyset_1 何かご不幸でもおありになったのですか。」 (= (5))
 「いいえ、 \emptyset_2 今人に別れて来たんです。」
- b. < “你是不是遭到什么不幸啦？” “不，我刚刚同她离别了。” > (葉)
- c. < “您遇到什么不幸的事吗？” “不， \emptyset_2 刚刚和人告别。” > (侍)

結果として、日本語の原文においては質問文でも応答文でも主題が省かれている。葉渭渠の訳文 (b) では質問文でも応答文でも「你」(アナタハ)「我」(ワタシハ)を補っている。侍桁の訳文 (c) では、質問文に「您」(アナタハ)を補っているが、応答文は日本語と同じように主題が省かれている。Li & Thompson (1981) の挙げた例 (7) に相当する。

- (18) a. 学生さん、 \emptyset_1 東京へ行きなさるのだね。 \emptyset_2 あんたを見込んで頼むのだからね、 \emptyset_3 この婆さんを東京へ連れてってくんねえか。(原文)
- b. < 同学，您是去东京的吧？我们信赖您，拜托您把这位老婆子带到东京，行不行啊？ > (葉)
- c. < 学生哥，你是去东京的吧， \emptyset_2 打算拜托你把这个婆婆带到东京去，可以吗？ > (侍)

(18) の日本語の原文では、 $\emptyset_1\emptyset_2\emptyset_3$ に主題が省略されているが、葉渭渠の訳文では、 $\emptyset_1\emptyset_2\emptyset_3$ のところにそれぞれ「您」(アナタハ)「我们」(ワタシタチハ)「您」(アナタハ)を補っている。侍桁の訳文では、 \emptyset_1 のところに「你」(アナタハ) \emptyset_3 のところに「你」(アナタハ)を補っており、 \emptyset_2 とのところが日本語の原文と同じように省略が見られる。

葉渭渠の訳文にせよ、侍桁の訳文にせよ、部分的にしかその5に適合しない。また、葉渭渠の訳文と侍桁の訳文と比べてみれば、同じ中国語の訳文であるとは言え、省略の箇所も異なってくる。両者とも質問文には、「你」または「您」(アナタハ)を補っているが、次に続く文には「我」(ワタシハ)を補ったり、省略したりしている。葉渭渠の訳文より侍桁の訳文が比較的に自然であり、日本語の原文にも近い。しかし、侍桁の訳本には、以下に示しているような主題の省略によって生じた誤訳がある。

- (19) a. はしけはひどく揺れた。踊子はやはり唇をきつと閉じたまま一方を見つめていた。私が縄梯子に捉まろうとして振り返った時、 \emptyset さよならを言おうとしたが、それも止して、もう一ぺんただうなずいて見せた。(原文)
- b. < 舢板猛烈地摇晃着。舞女依然紧闭双唇，凝视着一个方向。我抓住绳梯，回过头去，舞女想说再见，可话到嘴边又咽了回去，然后再次深深地地点了点头。 > (葉)

- c. * < 舳板摇晃得很厉害，歌女还是紧闭双唇向一边凝视着。我抓住绳梯回过头来，∅想说一声再见，可是也没说出口，只是又一次点了点头。> (侍)

日本語の原文の主題は「踊子」であり、第二文以下は略題となっているため、「さよならを言おうとした」のは「踊子」である。葉渭渠の訳文 (b) には、第二文の文頭に「我」があるが、途中で「舞女」(踊子) を補っているため、「さよならを言おうとした」のは、「踊り子」になる。動作主が日本語の原文と一致している。しかし、侍桁の訳文には第二文の文頭に「我」があるが、途中で「踊子」を補っていないため、「さよならを言おうとした」主体が「我」になってしまう。故に、原文から見ると動作主体が異なり、侍桁の訳文が誤訳となる。つまり、誤解をさけるために葉渭渠は主題を補って訳している。

7. 今後の課題

本稿では、日本語、韓国語、中国語における主題の省略について検討したが、韓国語の主題の省略に関する先行研究の調査などはまだ不十分である。また、ほかの『伊豆の踊子』の韓国語の訳本を探して、三上の主張した日本語の略題の五法則がどこまで韓国語に適合するかについて、再考する余地がある。

【参考資料】

- 川端康成 (2003) 『伊豆の踊子』新潮文庫
侍桁訳 (1981) 『雪国』上海訳文出版
葉渭渠訳 (2009) 『雪国・伊豆舞女』吉林大学出版社
장경룡 傭김 (1999) 『설국(雪國)』문예출판사 (文藝出版社)

【参考文献】

- 金善美 (2008) 「韓国語と日本語の主題標識『은/는(un/nun)』と『は』に関する対照研究」『言語文化』10 (4) 同志社大学言語文化学会、pp. 665-689
穆欣 (2012) 「日本語と中国語の主題・主格の省略について—『伊豆の踊子』を検討材料として—」『教育学研究紀要』(CD-ROM版)第58巻、中国四国教育学会
三上章 (1970) 『文法小論集』くろしお出版、pp. 155—162
Li, Charles N. & Thompson, Sandra A. (1981) *Mandarin Chinese—A functional reference grammar* University of California Press Berkeley and Los Angeles